

親鸞仏教センター通信

2013.
June

2013年6月1日発行
 発行者 本多 弘之
 編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)
 〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
 TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
 e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
 ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第45号

「如実の修行と相応する」とは?

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

天親(新訳では世親)の『無量寿經優婆提舍願生偈』(『浄土論』)を菩提流支三藏から授けられた曇鸞が、その註を書いたことについて最近気づいた小生の考えを記してみたいと思う。

世親の没年は、西暦480年ごろとされるが、曇鸞が生誕したのも、ちょうどそのころのようである。菩提流支が中国に渡来て翻訳にかかったのは、北魏の都・洛陽で西暦508年からとされる。その訳出は、『入楞伽經』、『深密解脫經』(『解深密經』の異訳)や『十地經論』などである。菩提流支は、北インドの人とされ、翻訳した經典等の内容から、唯識系統の学びを身につけて、中国に来たのであろう。彼はインドにおいて、世親と同じ時代を生きているから、直接・間接に唯識の学問を世親から受け継いでいたのではないか。『入楞伽經』、『深密解脫經』は唯識派にとっての所依の經典であるし、『十地經論』は直接、世親から受け取ってきたものとも考えられる。

曇鸞は四論宗の学者として抜きんでた人であったらしいが、健康を害して仙經を学んでいた。菩提流支の訳場に参加したのは、いかなる関心からかは不明だが、菩提流支が『金剛般若經』を訳出しているから、あるいはこれに興味があったのかもしれない。

その三藏法師との出遇いのなかで、話が健康法に触れて、師から厳しく学びの態度を批判されて、曇鸞は深く恥じ入り、その場で仙經を焼き捨てたと伝えられる。そして浄土教に帰して、『浄土論』を註釈し、『讚阿弥陀佛偈』を作っているのである。

上記のように同時代の人であるから、菩提流支は『浄土論』が唯識の学匠天親の著作であることを知ったうえで、翻訳して曇鸞に渡しているのである。曇鸞がこれを解釈するにあたって、龍樹の『十住毘婆沙論』から説き起こしているのは、菩薩道を退転しない信念を、阿弥陀の本願力に依る「聞名不退」の方法によるという点で、天親の『浄土論』制作の意図がこれと重なっていることを、菩提流支から指示されていたのではないかとすら思われるのである。

『浄土論』を解釈する基本態度に、『無量寿經』の本願の教えを仰ぎ、浄土莊嚴が法藏願力によるのだという見方をするのは、『深密解脫經』や天親の兄・無著の『攝大乘論』の仏土莊嚴とは異なって、『無量寿經』の法藏菩薩の如実修行(永劫修行)の本願力に相応しようとする求道心の問題だからであろうと拝察されるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⁽²⁵⁾

見えざるもののはたらき

親鸞仏教センター所長

本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第59回、60回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第59回では「第三十六願と第三十七願」について、第60回では「第三十八願から第四十願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第56回（第三十一願と第三十二願）から一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■ 方便法身

曇鸞大師が『淨土論註』で阿弥陀仏も阿彌陀の国土も「方便法身」とあるとおっしゃった。この場合の「方便」は『法華經』のいう嘘も方便という方便ではない。淨土を教えて、「法性法身」という形ないものを、形あるものとして語って気づかせるのだと。「法性法身に由つて方便法身を生ず。方便法身に由つて法性法身を出だす」（『真宗聖典』290頁、東本願寺出版部）と。この二種の法身は別ではない。けれども一ではないと。

化身上が方便だという場合は、そこに止まつてはならないと。そこからさらに本当の願いの世界に帰つてほしいという意味の方便。この場合の方便は、教学用語では「權假方便」といいます。これはまさに『法華經』などのいう方便です。方便法身という方便は、人間がそれを失うと、すべてを失ってしまう。だから、それしかない。それを忘れるといつても帰るべき拠点がなくな

る。「南無阿弥陀仏」が方便法身であるという場合は、これを忘れたら本願の教えを忘れてしまう。そういう意味の方便。象徴であるという方便なのです。形のないものを形にしている。実体的なものがあるわけではない。人間にとって精神生活というのは、何か具体的な形をとったものを通して形なきものを感じていくことが歩みになると思うのです。そういうことが非常に大事なのだと、つくづく思うのです。

例えば、一つ譬喻を出させていただくと、諸仏とは何であるかわからない。でも例えば、あなたのおじいさん、何年か前に亡くなつておられるだろうと。この世にはもう影も形もない。色も無いもしない。でも思い起こせば、おじいさんがいたころの姿かたちが現れるだろうと。そう思えば、あなたが今いることもおじいさんのお陰でないかと。そのような話をすれば、ああ、そうだなと何か感ずるわけです。いないものが意味をもつて感じられる。おじいさんばかりではない、おばあさんでもよい、亡くなつた母親でも、子どもでもどなたでもよいのです。ともかく、そういうないものがはたらくわけです。ないものがはたらくけれども、はじめから何もなければ何もわからない。でも、ある形にすれば、言葉にすれば、ないものが形をもつて、意味をもつわけです。

■ 祖父が怒っているような気がする

これは半分自慢になるのですが、このたび、親鸞仏教センターがお手伝いして、前田専學先生にお願いして、鈴木大拙英訳の『教行信証』

をオックスフォード大学出版局から出版することができました。本当に不思議な因縁で、いろいろな方がバックアップしてくださって出すことができました。

これをどうしても親鸞佛教センターでやらせてほしいと言って、当時の熊谷宗惠宗務総長にお願いして、取りかかることができたのは、一つには私の祖父（宮谷法含）が大拙先生に『教行信証』を英訳してほしいという手紙を出したということを聞いていたからです。祖父はもう死んでいるけれど、「俺がせっかく頼んでやつたのに、大谷派は何しているのだ。初版で出したきり、もう五十年もたって二版も出さん」と、あの辺で怒っているような気がしたのです。祖父は怒りっぽい人で、もう怒るとすごかったのです。祖父が怒っているような気がする、ぜひともやらせていただきたいと言ってお願いしたら、とんとん拍子でことが進んで、これは大拙さんも応援してくれたような気がするし、祖父も後ろから押してくれたような気がするのです。気がするので、実体はどこにもないです。私が勝手に思っている妄念かもしれません、こういう仕事を成り立してくれたのです。

こういうことは不思議なことで、見えないものがはたらくのです。そういう因縁で頼んできたのかと思われて前田先生も引き受けてくださったのではないかと思うのです。英訳を頼んだのは私の祖父なのです、再版をどうしてもやりたいのです、どうか引き受けてくださいと、そう私は言いましたから。前田先生は坂東性純先生の同級生ではないですかと。坂東先生が亡くなられた直後だったのです。坂東先生もこの本を出してほしいと願っておられた。坂東先生から頼まれたと思って引き受けてくださいと。そのような厚かましいことを言うことができたのも、ここに祖父がいて、祖父がしゃべっていると思ってお願いをしました。自分ひとりでやったとは、とても思えない。何か見えざるもののがバックアップしているように感ずるとできることもあるのです。

■ みんな他の力

自分の力で浄土を獲得しようとする要求が残っていると、本当の意味で本願他力のはたらきがいただけない。利用しようとするだけですから。自分がやりたいのだけれど、自分の力が足りないから他に依頼する。この世で通用している他力は、そういう意味です。曇鸞大師が他力という場合は、自分自身を成り立たせるような力を他力という。自分で自分になっているのではない。自分のはたらきはいただいたものだと。

私などは、このごろ、本当にそう思って仕事をさせてもらっているのです。自分でやっていのではなく、嫌でもやらされる。もう嫌だと言つておられない。みんな他の力がやらせてくれている。自分でやろうなどと思ったらくたびれてしまつて、とてもやっていられません。しかし、みんなやらせてもらっているのだと思うと、歓んでやれるようになります。好きなことならやろう、嫌なことはやりたくないといつたら、大概やりたくないのです。我執は煩惱を起こして、好き嫌いばかりを言つてゐるわけです。それが破れると、もったいなくもやらせてもらえるわけです。そういう眼で親鸞聖人のお言葉をいただいていけば、親鸞聖人の教えが少しづつ身に浸みてくるのではないかと、こう思うのです。

（文責：親鸞佛教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日 時：2013年6月5日㈭午後6時30分～9時
7月3日㈭午後6時30分～9時
8月7日㈭午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」G ブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

チケット：「真宗聖典」大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp/>

—現代と親鸞の研究会・第43回—

誰も知らない人口減少社会の意味

株式会社リナックスカフェ代表取締役
立教大学特任教授 平川克美



平川克美 氏

2013年1月22日、東京国際フォーラム（有楽町）において、株式会社リナックスカフェ代表取締役である平川克美氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。グローバリズム資本主義の価値観が支配する世の中、右肩上がりの志向をし続けてきた社会そのものがいま深刻な行き詰まりを迎えようとしている。平川氏はその問題の根にあるものを、現実の「人口減少」という社会現象を通じ、冷静に分析されていく。ここに研究会の一部を紹介する。

（元研究員 花園一実）

■ 経済成長は必要なのか

日本は経済成長し続けなければならぬと言われています。しかし、そうは言っても、社会の構成員である人は、必ずあるときから年寄りになり、最終的には死んでしまいます。私たちは永遠に生きられるわけではありません。しかし、そういうことを日ごろは考えず、今がずっと続くのではないかという想定のもとにいろいろなことをやろうとしています。「誰にでも見えているけれど、誰にも見えていない」ことがあるのです。現在の時代状況を正確につかむためには、いったんそういう私たちの偏見を全部括弧に入れて見ていく必要があります。今、日本は経済成長が落ち込んでいるように見えます。しかし、それはあくまで「経済成長率」の話で、実は経済成長自体はずっと右肩上がりで上がっているのです。ただ、そのグラフの角度が鈍っただけ、上がり方が緩やかになっただけなのです。世間で今経済成長しなければならないと言われるのは、すべてこの「経済成長率」の話です。

そもそも、日本が経済成長できていた理由は一つです。それは日本が貧しかったからです。経済成長をしていない国と、している国を考えてみると、経済成長をしている国というのはもともと貧しかった国なのです。戦後六十五年、貧乏な時代から国家の成熟と共に、人々がいろいろと物を持ち始め、それがある程度行き渡るようになり、ストックができたため、活発な需要がなくなったのです。これが、経済成長を横ばいにさせた原因なのです。ですから、確かに成長はしないかもしれません、世界から見れば日本の現状は、治安はよいですし、水は豊かで、とてもよい国だと思うのです。日本はだめになったと言う政治家もいますが、それはもう少し丁寧に見るべきだろうと思います。

■ 人口減少にまつわる偽りのイメージ

日本の人口動態を一千年スパンで見ていくまると、驚くべき事実がわかります。鎌倉時代には七百万人だった人口が、江戸時代に三千万人で安定し、明治に入ると爆発的に増えて、今の一億三千万人までいくわけですが、驚くことに日本の歴史において、人口が減っていく時代というのは、これまで一度もありません。歴史が始まって以来、私たちの親も、そのまた親も、日本人は人口減少するということを誰も経験したことがないのです。私たちはふつう、問題があれば過去の事例から学んで対策を立てます。しかし、人口減少については誰も考えたことすらないのでしょう。例えば、政府から育児給付金などの対策が出されていますが、ああいうものは数十年単位の短いスパンでしか、この問題を見ていないのでしょう。人口の減少は単に将来への不安が原因なのではありません。歴史のなかで将来に対する不安が強かった時代は、これま

でにいくらでもありました。第二次世界大戦前、江戸幕府崩壊前、人々が町中で斬り合いをするような戦乱の時代。しかし、それでも人口は変わらず増え続けてきました。同様に、アフリカのような貧しい国々であっても、人口爆発が起きているのですから経済不況も関係ありません。また一般的に、経済を成長させるために人口を増やさなければならぬ、人口が減ることは不幸だと言われています。しかし、一人あたりのGDPで言うと、今一番高いのはルクセンブルクです。ルクセンブルクは51万人強で日本の宇都宮市くらいの人口です。人口が少ないので当然一人に対する配分は増え、全然不幸ではありません。これで人口が減ると豊かさもなくなるというのは嘘だということがわかります。ならば、私たちはいったい何をもって「人口が減ってはいけない」という議論をしているのでしょうか。

■ 人口減少はなぜ起こるのか

そもそも人口はなぜ減っていくのでしょうか。それは女性が子どもを産まなくなつたからではありません。子どもは産んでいます。しかし、たくさんは産まなくなつたのです。つまり、女性の結婚年齢が上がり、出産期間が短くなつた、ただ、それだけなのです。では、なぜ結婚年齢は上がつたのでしょうか。それは、日本の家族形態が大きく変わったことに起因しています。日本の家族は、長子相続、家父長制の、権威主義的直系家族でした。しかし、1973年からの相対安定期の時代に、英米流の価値観が日本に輸入されます。その結果、週休二日制によって労働と消費が分化し、遊ぶために働くという価値観が生まれました。また、コンビニエンスストアの普及によって、昼夜が逆転し、家でご飯を作らなくてよくなりました。消費が世の中の中心になってきました。すると、お金を中心に世の中が回っていくようになります。価値観の中心がお金になることで、従来の父親の権威を中心とする日本の直系家族的価値観が変化し、男女の家族的役割も必然的に変化していったのです。お金があればベビーシッターを雇い、女性はその余った時間を他のことによわすことができます。かつては卓袱台を囲んで全家体が一つでしたが、ある時期を境に子ども部屋

ができ、それぞれの部屋にテレビが入るようになりました。そのうちに家を出るようになつていった。家族が一緒に暮らすという紐帯がものすごく弱くなつていったのです。

個人から見れば、これは個人の自由がどんどん広がっていくということでもあります。プライベートな空間が与えられ、プライバシーが重視されます。しかし、自由を獲得するということは、人々が孤立化するということでもあります。そして、この人々が自由を獲得していくプロセス、これは紛れもなく民主主義の成果なのです。ですから人口減少は、民主主義の成果であると言えます。善いか悪いかということではなく、私たちが、この旧封建的な家制度を自ら望んで壊していったのです。その結果として女性たちがその家から飛び出て、家庭を作ることをしなくなつた。そして私たちは、本当はそのことをよく知っているはずです。

(文責：親鸞仏教センター)

※平川克美氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第27号（2013年12月1日号）に掲載予定です。

平川 克美 (ひらかわ かつみ) 株式会社リナックスカフェ代表取締役

1950(昭和25)年東京都生まれ。早稲田大学理工学部機械工学科卒業。1977年に渋谷道玄坂に翻訳会社、株式会社アーバン・トランステーションを設立。1999年シリコンバレーのインキュベーションカンパニーである Business Cafe, Inc. 設立に参加、現在同社 CEO。2000年ビジネスカフェジャパン設立、現在同社代表取締役ファウンダー。2001年株式会社リナックスカフェ設立、現在同社代表取締役社長。2011年より立教大学特任教授。

著書に、『移行期的混乱：経済成長神話の終わり』(ちくま文庫)、『小商いのすすめ「経済成長」から「縮小均衡」の時代へ』(ミシマ社)、『俺に似た人』(医学書院)、『9条どうでしょう』(ちくま文庫)、『経済成長という病』(講談社現代新書)、『反戦略的ビジネスのすすめ』(洋泉社)など多数。

また、親鸞仏教センター情報誌『anjali』第22号に『『移行期的混乱』を生きるということ』をご執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(於：「東京国際フォーラム」)

じる心」が芽生える、その瞬間に、「すべての人間を、区別することなく救い取りたい」という如来の誓いの光のなかに、誰もが包まれているのです。ですからこれは、如来の大悲のもとで、この身を今、尽くしていけるのだ、ということでしょう。(訳・親鸞佛教センター)

原文

「乃至十念」ともうすは、如來のちかいの名号をとなえんことをすすめたまうに、遍数のさだまりなきほどをあらわし、時節をさだめざることを衆生にしらせんとおぼして、乃至のみことを十念のみなにそえてちかいたまえるなり。如來より御ちかいをたまわりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の称念をまつべからず。ただ如來の至心信樂をふかくたのむべとなり。この真実信心をえんとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらいにさだまとみえたり。(『真宗聖典』五一二頁)

参考

(頁はすべて『真宗聖典』……は省略を表す)

◆如來のちかいの名号
・弥陀世尊、もと深重の誓願を發して、光明名号をもつて十方を攝化したまう。ただ信心をして求念せしむれば、上一形を尽くし、下十声、一声等に至るまで、仏願力をもつて往生を得易し。

(一七四頁『教行信証』行巻)『往生礼讃』

◆遍数のさだまりなき／時節をさだめざる

・乃至は、かみしもとおおきすくなき・ちかき・とおき・

ひさしきをも、みなおさむることはなり。多念にとどまるところ

をやめ、一念にとどまるところをとどめんがために、法藏菩薩の願じます御ちかいなり。

(五五八頁『唯信鈔文意』)

・行住座臥不問時節久近」というは、「行」は、あるくなり。「住」は、たたるなり。「座」は、いるなり。「臥」は、ふすなり。「不問」は、とわざといふなり。「時」は、ときなり、十二時なり。

「節」は、ときなり、十二月、四季なり。「久」は、ひさしき、「近」は、ちかしとなり。ときをえらばざれば、不淨のときをへ

だてす、よろぞのことをきらわざれば、不問といふなり。……

念多念のあらそいをなすひとは、異学別解のひとともうすなり。

異学というは、聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念す、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとえに自力をたのむものなり。

(五四一頁「一念多念文意」)

◆尋常の時節をとりて、臨終の称念をまつべからず

・「願力得往生」というは、大願業力攝取して往生をえしむといえるところなり。すでに尋常のとき、信樂をえたる人というなり。

臨終のとき、はじめて信樂決定して攝取にあずかるものにはあらず。ひごろかの心光に攝護せられまいらせたるゆえに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆえに、臨終のときにはあらず。かねて尋常のときよりつねに攝護してすてたまわざれば、攝得往生ともうすなり。……臨終の来迎をまつものは、いまだ信心をえぬものなれば、臨終をこころにかけてなげくなり。

(五二二頁『尊号真像銘文』)

◆攝取不捨の心光

・ただ阿弥陀仏を専念する衆生ありて、かの仏心の光、常にこの人を照らして攝護して捨てたまわず。すべて余の雜業の行者を照らし撰むと論ぜず。

(二四八頁『教行信証』信巻)『觀念法門』

◆正定聚のくらい

・正定聚のくらいは、ともかくも行者はかかるいあるべくまえて候う。攝取のうえには、ともかくも行者はかかるいあるべくまえて候う。淨土へ往生するまでは、不退のくらいにておわします候えば、正定聚のくらいとなづけておわします事にて候うなり。まことの信心をば、浄土へ往生するまでは、不退のくらいにておわします事にて候うなり。

申すは、攝取にあずかる時にて候うなり。そのちは、正定聚のくらいにて、まことに淨土へ往生するまでは、候うべしとみえ候うなり。

(五九〇頁『御消息集』)

『anjali』第25号および

『現代と親鸞』第26号を刊行

このたび、『anjali』第25号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第26号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第25号では、医師で神戸大学大学院教授の岩田健太郎氏、漫画家のこうの史代氏、同志社大学神学部教授の小原克博氏、作家でジャーナリストの佐々木俊尚氏、九州太学副学長の吉岡斉氏、絵本作家のあべ弘士氏、哲学者の山田邦男氏、明治大学情報コミュニケーション学部教授の友野典男氏、大谷大学学長の草野顕之氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第26号では研究論文のか、「現代と親鸞」研究会から名古屋外国语大学学長の龟山郁夫氏の問題提起と質疑。清沢満之研究会から舞鶴工業高等専門学校准教授の吉永進一氏の講義と質疑。「親鸞佛教センターのつどい」から作家の辺見庸氏と本多弘之所長の講演。「第7回親鸞佛教センター研究交流サロン」から東京経済大学教授の櫻井哲夫氏の発題と大谷大学准教授の藤枝真氏のコメント。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

人生の悲しさとして、「報われない」ということがある。どれだけ努力しても、あるいはどれだけの善意をもってしても、自分の期待どおりの結果が返ってくるかどうかは別の問題である。例えば震災以後、その根本的な問題性が指摘され続けている「原発」だが、かつては日本の未来のため、世界のエネルギー問題のため、原発推進の使命感に燃える『真剣な』科学者はそれこそたくさんいたという。それを無意識のうちに受け入れてきた大多数の私たちにしても、悪意をもってそうしていたわけではない。

「私たちもみんな『決めたから』である。そもそも、『これは良い』、『あれはダメ』と決めていかなければ、私たちの生活が成り立たない。しかし困ったことには、同時にその判断のもじで苦しまなければならない。それは『南無阿弥陀仏』に対してもそうである。時代と環境のもとでいくらでも変化する、あやふやな価値判断によって、歪めなくてよいものを歪め、そのせいでかえって苦しんでいる。親鸞の受け取った「ただ信せよ」、「ただ念せよ」とは、私たち一人ひとりが抱えている、堂々巡りのこの悲しみに対する呼びかけである。」（研究員 内記 洗）

『尊号真像銘文』試訳(3)

現代語

「乃至十念」

「乃至十念」というのは、どのように念佛したらよいかという、念佛の仕方についての善し悪しを、私たちがあれこれと言う必要がない、というのです。如來の誓いは、私たちに「ただ信ぜよ」と呼びかけています。それに応えて「南無阿弥陀仏」と口にするのですから、たくさん称えたほうが良いとか、一度だけすれば良いとか、あるいはいつ、どのような場合に念佛したら良いなどといったことは、そもそも問題ではありません。如來の誓いとして、「乃至」という言葉が「十念」という言葉——つまり「南無阿弥陀仏」という言葉——のうえにあえて添えられているのは、このことを教えるためなのです。如來からすでにそう誓われているのですから、念佛とは、死ぬときに仏さまの「お迎え」を期待してするものではありません。ただ、日々の生活の一瞬一瞬に「南無阿弥陀仏」が口をつく。如來が誓つてくださっている「至心信樂」——ただ一つに、疑うことなくお任せしなさい、といふのですから、そのほかにどんな思慮分別を加える必要があるでしょう。この眞実の「信

親鸞仏教センターの動き

(2013·254) —抄出—

●清沢満之研究会報告⑯●

清沢満之の真宗的意義

元親鸞仏教センター研究員 春 近 敬

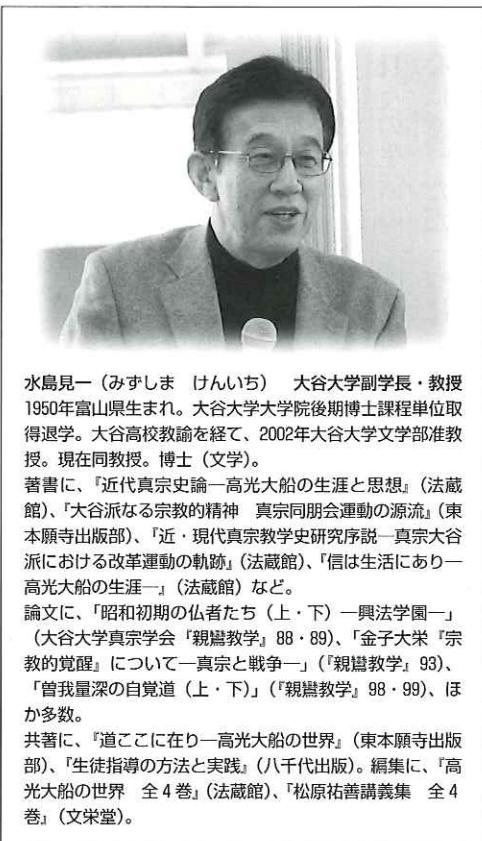
2013年2月20日、フクラシア東京ステーション（千代田区）にて、大谷大学副学長の水島見一氏をお招きして「清沢満之研究会」を開催した。「清沢満之の真宗的意義」というテーマでご講義いただいた後、研究員を交えて活発な議論が交わされた。当日の内容は多岐にわたるものであったが、紙幅の都合上、ここではその一部を紹介する。

■ 信仰の主体

清沢満之を明らかにすることにおいては、単に残された書物や論文の分析だけでなく、清沢満之という人の歩みをトータルで見る必要があります。むしろ、文献のみの分析に終始すればするほど、ある意味で清沢満之から遠ざかっていくという側面があると思います。

清沢満之は非常に苦悩の多い人生を歩まれました。結核を抱えていた清沢の最も大きな課題は、死の問題でした。そして、家族や親類や寺をめぐって、身も細るような人情の煩累にもさいなまれていました。このようなものはいずれも代わりがきかず、自分で引き受けなければならないものです。そのような問題に清沢は立ち向かっていたのだということを踏まえて、かの

「自己トハ何ソヤ 是レ人世ノ根本的問題ナリ」（『臘扇記』）という文章を読むと、非常に理解しやすくなります。自己とは何であるかといえば、端的に言えば宿業の身なのであり、結核で死ぬことに対する恐怖をもつ自己、人情の煩累でやりきれない自己なのだ、ということがわかります。そして、「自己トハ他ナシ 絶対無限ノ妙用ニ乗托シテ任運ニ法爾ニ此境遇ニ落在セルモノ即チ是ナリ」と続きます。落せるものとは何かといえば、業縁存在の自己をそのままにいただいたいということなのだと読むことが



水島見一（みずしま けんいち） 大谷大学副学長・教授
1950年富山県生まれ。大谷大学大学院後期博士課程単位取得退学。大谷高校教諭を経て、2002年大谷大学文学部准教授。現在同教授。博士（文学）。

著書に、『近代真宗史論—高光大船の生涯と思想』（法藏館）、『大谷派なる宗教的精神 真宗同朋会運動の源流』（東本願寺出版部）、『近・現代真宗教学史研究序説—真宗大谷派における改革運動の軌跡』（法藏館）、「信は生活にあり—高光大船の生涯—」（法藏館）など。

論文に、「昭和初期の仏者たち（上・下）—興法学園—」（大谷大学真宗学会『親鸞教学』88・89）、『金子大栄『宗教的覺醒』について—真宗と戦争—』（『親鸞教学』93）、『曾我量深の自覚道（上・下）』（『親鸞教学』98・99）、ほか多数。

共著に、『道ここに在り—高光大船の世界』（東本願寺出版部）、『生徒指導の方法と実践』（八千代出版）。編集に、『高光大船の世界 全4巻』（法藏館）、『松原祐善講義集 全4巻』（文栄堂）。

できます。

このような清沢の述懐を、『歎異抄』の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案づれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」（『真宗聖典』640頁、東本願寺出版部〈以下『聖典』と略記〉）の文に照らしてみると、親鸞聖人と清沢満之は、ともに同じ本願の仏道を歩まれた方なのだということがわかります。「五劫思惟の願をよくよく案づれば」というところは「自己トハ何ソヤ」という問題に、「そくばくの業をも

ちける身にてありけるを」を「落在セルモノ即チ是ナリ」に、「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」を「絶対無限ノ妙用ニ乗托」する自分だということに、それぞれ合わせて読むことができます。

親鸞の仏道の根幹は、宿業の身と本願との関係です。清沢も「宿業」や「本願」という言葉は使っていませんが、言っている内容は同じです。曾我量深は、「(清沢が)『エピクテタスの教訓』を読まれて、始めて自己の分限を自覚することが——実際において自覚することが——眞実の救済であると了解できたのである。」(『分水嶺の本願』)と押さえています。一般論でなく、実際において自覚することが眞の救済であるということです。清沢は親鸞をどのように解釈したか、というような問題ではなく、清沢も親鸞と同じ本願の道に立たれたのだ、というかたちで私は受け止めています。

■ 信後の生活

親鸞聖人は『教行信証』『信巻』『証券』などで信心を得た後の生活について言及しておられます、清沢満之はそれを具体的なかたちで示しています。

信心を得れば迷わないのかといえば、決してそうではありません。信心を得てもやはり自力的な妄念に襲われます。しかし、それがかえって他力の信楽^{しんぎょう}を明らかにすることができるのです。これを清沢は「信仰ト修善ト交互ニ刺戟^{さしけい}策励シテ以テ吾人ヲ開発セシムルモノ是レ則チ絶対無限ナル妙用ノ然ラシムル所豈ニ讚歎ニ堪^あユベケンヤ」(『臘扇記』)と書いておられます。そして、これが「自信教人信ニ至ル第一要件ナリ《悟後修行ノ風光ナリ》」であり、修善と自信教人信との「連鎖的循環行事」がずっと続していくのだと押さえておられます。

われわれは、仏道に立てば今までとは違う自分になれるかのような感覚を拭い去ることがなかなかできません。しかし、清沢の文章を読めば、また元に戻り、またそこで聞法していくのだということ、むしろ信の一念において、いよいよ婆娑を担って歩いて行けるのだということが明らかにされるのです。

これを親鸞にたずねれば、「信巻」真仏弟子釈に「自ら信じ人を教えて信ぜしむ」(『聖典』247

頁)とあります。そして眞の仏弟子は弥勒に同じく、娑婆の業火の中をも歩いて行けるのだと言っておられます。そして、最後には「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞」(同251頁)と、自らの宿業に立ち帰るのです。

清沢の「他力の救済」は、『精神界』に掲載されたときには「嗚呼他力救済の念は、能く我等をして迷倒苦悶の婆娑を脱して、悟達安樂の淨土に入らしむ」と記述されていますが、元の手稿では、「能く“我”をして」(" "は筆者、以下同じ)とあり、「悟達安樂の淨土に入らしむる“が如し”」となっています。同じく、「我は實にこの念により現に救済されつゝあり」の記述が、元は「現に救済されつゝある“を感じ”」という表現になっています。ここからも、清沢は一般論でなく、自己の現生の問題として受け止められていたことがわかります。

曾我量深は、「私共は過去の世界に醉生夢死してはならぬ」(『闇へ闇へ』)と言っておられます。信を得た段階ですでに過去なのであって、そこにいつまでも憧れていてはいけないのだということです。そして、二河譬^{ひづきよう}のたとえについて「畢竟^{さき}光明の觀念世界から醒めて、生死現実の闇黒の世界に念佛の燈火を掲げることを示すものである。光から闇へ、闇へ闇へ、此が他力の大道である」と言います。信を得たから終わるのではなく、信を得たからこそ、そこにひとつの業因縁の婆娑と向き合って歩んでいく力を賜るのです。このようなところに親鸞聖人は立っておられて、清沢満之もまた同じところに立って歩まれたのだと思います。

※水島見一氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第27号(2013年12月1日号)に掲載予定です。



「清沢満之研究会」(於:「フクラシア東京ステーション」)

●『教行信証』真仏土・化身土巻研究会報告④●

『教行信証』の諸問題

—親鸞自筆・坂東本を通して—

元親鸞佛教センター研究員 花園一実

2013年2月27日、東京ガーデンパレス（文京区）において、大谷大学准教授である三木彰円氏をお招きし、「『教行信証』の諸問題—親鸞自筆・坂東本を通して」というテーマで、『教行信証』真仏土・化身土巻研究会を開催した。三木氏は、唯一現存する親鸞自筆『教行信証』である「坂東本」の修復事業に携わられ、そこで得られた知見や成果の内容を、『真宗』誌等、各地で広く公表されている。このたび、新たに翻刻本『教行信証』を出版された経緯を受けて、われわれが坂東本を通して、『教行信証』を学んでいくことの意味についてお話をいただいた。ここにその研究会の一部を紹介する。

■ 坂東本の基本的性格

周知のとおり、宗祖親鸞聖人750回御遠忌の記念事業として坂東本の御修復が行われました。これは原本にかなり傷みが生じてきたということと、そしてやはり親鸞聖人の直筆本として唯一のものですから、それをしっかりとしたかたちで後々の人に見ていただく必要があったわけです。このような背景のもと、カラー原寸の影印本が作成され、また二部だけですが、原本に限りなく近い複製本も作られました。そしてこのたび、朱書きを含め原本に忠実な活字化を行った翻刻本が発売されるに至ったわけです。これには付録として、親鸞聖人の記された文字の一覧や、合点^{かつてん}と呼ばれる線引きの箇所なども併せて収録されています。このように、坂東本を通して『教行信証』を読むことができる環境が徐々に整ってきたわけですが、そこで改めて坂東本とは何であるのか、『教行信証』がどういう性格の書物であるのかということを確かめていきたいと思います。

まず一つは、坂東本には親鸞聖人の60歳前後から最晩年に至るまでの筆跡が確認されるとい



三木彰円（みき あきまる） 大谷大学准教授
1965年宮崎県生まれ。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程（真宗学）単位取得退学。文学修士。
論文に、「難治の機—課題的存在としての人間」（『大谷大学大学院研究紀要』9）、「本願と信知」（大谷大学真宗学会「親鸞教学」63）、「真宗興隆の大祖」（『親鸞教学』69）、
「親鸞における教学の視座（上・下）」（『親鸞教学』76・77）、「無窮の志願—「坂東本」修復・復刻事業を通して—」（『親鸞教学』87）、「親鸞における愚禿釈の名乗りと無戒名字の比丘」（『日本仏教学会年報』74）、「親鸞における『教行信証』の課題」（『親鸞教学』98）など。
共著に『ブッダと親鸞』（東本願寺出版部）。
また、2007年8月から2009年6月まで、真宗大谷派機関紙『真宗』に「『坂東本・教行信証』と親鸞」をテーマに連載。

うことです。細かく言えば、だいたい基本的な部分は58歳から62歳の間に記され、それが84歳ごろに、また大幅に書き直されていったと見られます。また筆勢などを見ていきますと、親鸞聖人の書かれた88歳のお手紙や書物などと重ねて見ることができます箇所もあります。つまり、60歳ごろから入滅される直前まで、約30年間にわたって、親鸞自身による本文や訓点の加筆推敲が継続されているということです。そして、それは文章だけでなく、典籍の形態にも及びます。冊子の綴じを開き、形を改めるなどの作業が行われているのです。例えば、「化身土巻」などは二冊に分かれておりますが、これは当初一冊であったということが判明しております。このように親鸞が60歳ごろから最晩年に至るまで

の、自筆本であり、所持本であったということが、まず坂東本の基本的な性格としてうかがえるのです。

■ 坂東本に学ぶということ

また、坂東本はこれまで草稿本（下書き）として見られることが多いのですが、しかし実は60歳頃に一度、親鸞によって清書されていましたということがうかがえるのです。通常、私たちが漢文を写す際は、まず一文ずつ漢字を書き、それに送り仮名を付け、返り点を付けていくという手順を考えます。しかし、坂東本が記されていく経緯を考えると、その手順はどうも考えにくいのです。さまざまな状況から見て、まず最初に本文はいったんすべて白文で記されていたものと考えられます。ある一つのまとまったかたちができていた状態を、清書するかたちで漢文が記され、それに対して訓点が記入されていき、また、それを踏まえて本文が加えられ、あるいは削られていく。それに伴ってまた訓点も改められているのです。そういう意味で、これは書誌学の区分で言いますと、いわゆる中清書本というものに該当するのです。清書されたものに、一部またさらに清書として重ねられていく。こういうかたちで書き改め続けられていったものが坂東本なのです。

この白文だけが抜き出され並べられている状態を、要文が類聚^{るいしゅう}された状態と呼びます。真宗の伝統では高倉学寮以来、御自釈と要文の言葉を分け、御自釈を中心に学んでいく傾向がありますが、「真宗の證^{せん}を鈔^{ひろ}し、淨土の要^{ひら}を摭^うう」（『真宗聖典』400頁）と言われるように、淨土真宗を顕^{あらわ}かにする要となる三經七祖や經論釈の言葉を抜き出し、要文として配置していくというところに親鸞の大切な聞思があるのです。この親鸞が聞思されたものを、私たちは親鸞の御自釈を指南しながら、またさらに聞思していく。『教行信証』を読むにあたっては、このような姿勢が必要になってくるのではないかでしょうか。そしてまた、親鸞がこの白文として抜き出された要文を、今度はいかに訓読していくかという点に大変な労力と時間が費やされていましたが想像できます。それはつまり、すでに漢文としてある文章の内容をしっかりと把握し、それを和語として再び表現しなおしていくという営為でもあるのです。例えば、本願成就文に

おける「至心回向」のように、もともとの漢文においては主語が明記されていない文章を、「至心に回向したまえり」と読むことで主客関係を明確化し、さらに尊敬語を使うことで、それが如来を主語とするものであることを表現されています。『教行信証』という書物が、大部分は引文によって構成されておりながら、なおかつそれが親鸞独自の思想であるということは、この訓読に負うところが非常に大きいのです。

■ 翻刻本出版の意義

今回、御遠忌事業として、この影印本の復刻・翻刻と同時に、教学研究所からは現代語訳を、親鸞仏教センターからは鈴木大拙の英訳『教行信証』を再度出版していただきました。そして現在は、英訳されたものをさらに現代語訳するということにも取り組んでおられます。これらの取り組みは、親鸞聖人におけるこの訓読の作業とよく似ているのではないかでしょうか。なぜなら、これらの取り組みの過程において、教えの内容を確認する言葉の吟味が当然なされているわけでありますし、それを再び表現しようとするところに、教えを再確認していくことがあるわけです。ある意味で『教行信証』とは、これまで読まれてきたものを、親鸞自身が新たに読み直し、自らの時代の現実のなかで確かめられていった、親鸞による現代語訳化の作業と言ってよいのではないかと思います。そしてこのたび、翻刻本が出版されたということは、今度は私たちがいつでも現代語訳を新たに作っていきながら、教えを確かめていくことができる、そういう環境がいよいよ整ったということなのだろうと思います。

※三木彰円氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第27号（2013年12月1日号）に掲載予定です。



「『教行信証』真仏土・化身土巻研究会（於：「東京ガーデンパレス」）

■ 第8回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催(2013年3月28日)

親鸞仏教センターでは、これまで関わりをいただいたさまざまな分野の有識者の方々と、共通のテーマにもとづいて相互に意見交換ができる場として、「研究交流サロン」を開催している。

第8回目となる今回は、フクラシア東京ステーション（千代田区）を会場に開催され、「〈尊厳死〉を問い合わせ—〈生きている〉から考えていくためにー」というテーマで、NPO法人ALS/MNDサポートセンターさくら会理事の川口有美子氏から発題をいただいた。その後、コメントーターとしてお招きした龍谷大学教授の鍋島直樹氏の発言を皮切りに、参加した約30名の方々と意見交換を行った。

川口氏は、難病中の難病と言われる筋萎縮性側索硬化症(ALS)を罹患した母親の介護を通して気づかされた人間の尊さについて語られ、現在同じ病に苦しむ患者と家族をサポートする取り組みについて紹介された。そして昨今、「安楽死」という言葉が「尊厳死」と名を変え、その行為が法制化されることによって、終末期患者の本当の意思が取りこぼされること、さらには、この法制化がきっかけとなり、今以上に弱者が淘汰される世の中になっていく可能性があることに警鐘を鳴らされた。

この発題を受けて鍋島氏は、「患者を大切に思う心は一つではなく千差万別であるため、法律を設けることにより、終末期のあり方が限定される危険性がある」と指摘した。また、死生観について仏教の立場から応答され、特に「死を受容することが仏教のゴールではなく、生を全うしていく事が仏教の教えである」と力強く話された。

続いて、医療関係者をはじめ法曹界、メディア関係者などが、それぞれの立場から尊厳死に対する認識や、介護の現状についてなどを話され、活発な意見交換がなされた。



■『アンジャリ』バックナンバーのご紹介

『アンジャリ』は、経済、思想、教育など専門分野で活躍される方々に現代の課題とその苦闘をご執筆いただき、21世紀の確かな時代の方向を探る情報誌です。なお、「アンジャリ」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味します。

añjali

(20)
ALCA



añjali

(21)
ALCA



añjali

(22)
ALCA



añjali

(23)
ALCA



añjali

(24)
ALCA



第20号

香川知晶氏 山梨大学大
学院教授 他

第21号

龜山郁夫氏 名古屋外國
語大学学長 他

第22号

平川克美氏 (朝)リナック
スカフェ代表取締役 他

第23号

木谷明氏 弁護士・元裁
判官 他

第24号

天童荒太氏 作家 他

※最新号、第25号については6面下をご参照ください(各500円・送料込み)。

「アンジャリの会」にご入会いただきますと、親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円(送料込)で、『アンジャリ』(年2回)と機関雑誌『親鸞仏教センター通信』(年4回)をご自宅にお届けします。ぜひご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。

■申し込みと問い合わせは、
親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jpまで。

■出版物のご紹介

◇『「歎異抄」にきく 死・愛・信』ぶねうま舎
『歎異抄』について考究を深める武田定光氏(当センター元嘱託研究員)の新著で、親鸞の思想に多角的にせまる連続講座の講義録です。聴講者との対話をも収録されています。
お問い合わせは、ぶねうま舎まで
TEL 03-5228-5842



●センター新スタッフの紹介

研究員 藤原 さとる
武田 定光
1983年大阪府生まれ。大谷大学文学部真宗学科卒業。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了。同研究科博士後期課程

程満期退学(真宗学)。元大谷大学文学部任期制助教。同非常勤講師。博士(文学)。

嘱託 田鶴浦 裕
たづうち ゆう